

まえがき

柳模様 willow pattern と呼ばれる、中央に柳を置き、愛をささやきあうかのごとく空を飛ぶつがいのキジ鳩やマンダリン（中国の高級官吏）の館、その館を取り巻くジグザグのフェンス、さらに中国風の橋の上を歩く、もしくは走るように見える三人の人物などを周辺に配した陶磁器の文様がある。いかにも中国風の文様である。この文様は、マンダリンの美しい娘とマンダリンに仕えた若い書記との許されざる悲恋の物語を表しているともいわれている。

この文様は、一八世紀末にイギリスで案出されたもので、一七、八世紀の中国ブームⅡシノワズリー chinoiserie の産物である。この中国ブームは一九世紀の初頭には終わるのだが、柳模様は一九世紀中はもちろん、ごく最近までイギリス社会でもてはやされていた。ロンドンの自称世界一の背董市、ポートベロー・マーケットの陶磁器を扱う骨董屋に行けば、様々な柳模様の陶磁器があふれ、かの王室御用達のデパート、ハロッズにも高級感のある柳模様が鎮座していたのである。もちろん、地方にも柳模様はあった。インターネットの世界でも柳模様の人気を容易に確認できる。柳

模様物語を子供向けに翻案した絵本を本屋で買うこともできる。

イギリスの人々は、非常に長い間この柳模様を慣れ親しんできた。それゆえ、一九世紀のイギリスを舞台にした映画を見ると壁に柳模様が飾られているし、もちろん小説にも登場する。イギリスの人々には、柳模様といえば中国だし、中国といえば柳模様であった。そういう時代が、少なくともかなり最近まであった。

『日本奥地紀行』（高梨健吉訳、平凡社東洋文庫、一九七三年）で日本でも有名な、ヴィクトリア時代の旅行家、イザベラ・バードは一九九九年に出版された『中国奥地紀行』（金坂清則訳、平凡社東洋文庫、二〇〇二年）のなかで次のように述べている。

実際、私は中国的な風景とか中国的な建造物とはどのようなものなのかについての先入観を毎日のように捨てていった。読者の方々も、もし柳模様の描かれた大皿からイメージするような先入観をおもちだしたら、そんなものは本書を読み終えるまでに捨てていただければと思う。（『中国奥地紀行』三四六頁。一部改訳）

この一文が書かれたのは一九世紀末のことだが、その頃のイギリスの人々は中国を柳模様の色眼鏡で見ってしまう傾向があったということである。実際この柳模様は、以下に述べるようにイギリスの人々に大きな影響を与えてきた。とすれば、柳模様がイギリス社会に与えてきた影響とはどのよ

うなものであったのか、またなにゆえに今日に至るまで長く人気を得てきたのかを考えることは、きわめて興味深い問題であろう。ところが、今日に至るまでそのような問題が取り上げられることはなかった。しかしながら、柳模様というこの陶磁器の文様は、近代イギリスの中国イメージを考える場合、ある意味では根底的な重要性を持つものだったのである。

通説的には、近代イギリスの中国イメージは、一八世紀から一九世紀にかけて大きく変化することになっている。慈悲深く、徳の高い皇帝の統治を讃えるイエズス会の報告を基礎にした、きわめて肯定的な中国イメージから、一九世紀の退化、停滞などを基調とする、きわめて否定的な中国イメージへと変化するというのである。そうした変化があったことについては否定できないが、それでは終わりではない。こうした変化とは別に、イギリスの人々を捉え続けていた中国イメージがあったのである。

柳模様は、そこに悲恋の物語が描かれている文様であるというにとどまらない。イギリスの人々は、そこにある種の中国イメージを見いだしていたのである。つまり、柳模様は、これから本書で縷々述べることになる、ある種の中国イメージを体現していたのである。しかし、こうしたイメージの存在とその意義は、これまで見逃されてきたのであった。それには理由があった。その理由はいずれお話しする。

本書は、この、これまで見過ごされてきた柳模様を中心とする中国イメージについて、私の柳模様を求めての旅を絡ませながら語ろうとするものである。

柳模様は、日本とも関わりが深い。かつて日本でも各地で柳模様が生産されていた。筆者が住む金沢のお隣の松任まつじま（現在白山市）には、いまでも柳模様の陶磁器（正確には硬質陶器）を生産しているメーカーがある。ただし、柳模様については日本ではあまり知られていない。実のところ、陶磁器の専門家や研究者でさえ、あまりよく分かっていないようである。のちほど紹介するが、日本の代表的な陶磁器の大辞典も、柳模様とその物語を正しくは伝えていない。